

近藤恭造さん

1929(昭和4)年1月10日生まれ

当時の本籍地 東京都

海軍 特信班

瑞鶴、大和田通信隊

最終階級 二等兵曹



●1944(昭和19)年1月10日 15歳になり、海軍防府(ほうふ)通信学校入校 (準特年兵)

神田電機学校(現在の東京電機大学)の本科(4期)に通っていたとき、同じ学校の生徒が志願するようになって、自分もと思いました。海軍では14歳で募集する最年少の志願兵を「特年兵」といいますが、通信・電測・予科練は「準特年兵」です。当時は「少年通信兵」として募集していて、これに志願しました。特年兵は海兵団に入隊しますが、準特年兵は各専門の学校に入校します。15才になり、海軍防府通信学校(山口県)に入校しました。防府では三田尻湾でカッター訓練や手旗訓練を受け、1ヶ月後に神奈川県横須賀市久里浜の海軍通信学校に移動して初年兵教育。このときは通信のツの字もない生活でした。

●1944(昭和19)年3月 50名が鈴川通信隊(静岡県吉原市)へ。特信班教育を受ける

同期2000人のうち50名が静岡の「鈴川通信隊」に行かされ、3月から10月まで特信班の教育を受けました。この50名は旧制中学を中退した人が多く、英語教育を受けた人たちを集めたのかもしれませんが。鈴川通信隊には建物が1棟があり、他には管理棟がありました。1階が寝たり食事をすると、2階が教場。50名しかいないので和やかでした。トイレが広く使えたので便秘とは無縁でした。教員は6名がいて、受信機は60台あり、横引き電鍵(モールス信号を打電するために手で操作する一種のスイッチ)を使いました。教育は朝から夜まで1コマ90分。英会を使う教育や1分間にアルファベット120文字を聞き取る訓練、耳と指の運動などをさせられました。耳の運動は耳に手を当ててぱつと離す。これを繰り返すと頭がくらくらします。指は小さい仕出しナイフで鉛筆削りを毎日20本。指にタコができました。

●1944(昭和19)年10月 第70期普通科練習生卒業、第一機動艦隊司令部「瑞鶴」配属

第70期普通科練習生を卒業しました。偶数期が志願、奇数期が徴兵。50名から10名が選抜されて「瑞鶴」に配属されました。呉の鎮守府にいて、そこから大分の航空隊基地で艦隊来港まで3日間くらい待機しました。

10月19日の夕方、空母「瑞鶴」に乗り組み、10月21日に上等水兵に昇進しました。特信班は20名で、士官3名(海軍予備学生1期中尉と2期の少尉2名)、下士官7名、上等水兵10名。特信班は国外通信(傍受)担当で、通信室は倉庫をつぶして作ったので艦の一番下。味方通信担当の通信室が上甲板近くと艦の下部にあるのと比べると差がありました。電信室の受信機はロープで縛り付けられた92式特改3、4が15台。10名は寝るところがなく倉庫みたいな所に毛布にくるまっていました。艦内旅行をしました。火薬庫以外はどこに行ってもよいとのことでした。

●1944(昭和19)年10月25日「瑞鶴」沈没

24日に戦闘状態に入りました。25日、衝撃があつて電灯が消えました。30度に傾いたとき退艦命令が出て、上出兵曹が「俺についてこい」と言ってくれました。ハッチは閉められ、避難用の通路が1カ所あけてありますが、艦の一番下で、真っ暗闇。自分ではとても無理です。甲板まではビル4階建てと同じ高さで、タラップを6つ上がらないと上甲板(飛行甲板)に出られません。上出兵曹の声をたよりについていき、上甲板に出て、縁(へり)にしがみついていた。「全員飛び込め」と命令があり、すべり降りるように飛び込みました。とにかく200メートルは離れろと言われていたので死に物狂いで泳ぎました。瑞鶴は最後は直立し沈没。すごい渦が巻いて、ずーんずーんと体に響く震動が来ました。瑞鶴の沈没後に浮いてきた材木なんかにつかまって助けを待っていました。人が固まるとグラマンの機銃にやられるので、「散らばれ！」と古参が怒鳴っていました。

●1944(昭和19)年10月25日 駆逐艦若月に救助される

駆逐艦が来たので、急いでその方向に泳いでいくが間に合わず行ってしまい、非常にながかりきましたが、とにかく生きようという気持ちで次の機会を待ちました。駆逐艦若月が来てくれて、垂らした網をつかんで今度は救助されました。その前の駆逐艦は沈没してしまったので自分は運がよかったのだと思います。同期の9名が戦死しました。

●1944(昭和19)年11月 大和田通信隊配属

●1945(昭和20)年9月 復員